

## アスタラビスタ・アミーゴ！

栗倉 輝彦

33年前の1979年1月、国際協力事業団（JICA）がお世話をするアルゼンチン人3名が旧水産孵化場にやって来た。真冬の寒い季節であったが、ニジマスの採卵の時期で、採卵親魚の魚病検査を行う時期であった。当時、本州のニジマスの主要生産県では、ウイルス性の魚病が多発しており、病原体に汚染されていない種卵を供給することが求められており、その検査は産卵期に卵と一緒に排出される体腔液のウイルス検査で汚染の有無が証明できたので、この時期に検査が行われていた。

アルゼンチンからの研修生の滞在中に、この検査のためのサンプル採集が行われており、北海道で一番大きなニジマス養殖場のある上川町に、連中も一緒に、一泊二日の出張に出かけることになった。

午後に行われた体腔液採集も無事終了し、夕食は

層雲峡温泉にあった上川町営の温泉ホテルで日本式の宴会が行われた。駅前の宿に戻る前、宿の近くのバーで二次会になったが、上川町漁協の皆さんが良くしてくれた。

小生はこの年の秋に、3ヶ月間の海外研修に出かけることが内定しており、英会話の勉強をしていた関係で、通訳抜きに積極的に話しに入るよう努めていた。3名の内、1名だけが英語が達者であったが、残りの二人はスペイン語通訳を介さないと意思が通じなかった。その英語の達者な人がアレハンドロ・デル・バージェであり、バーから宿に帰る途中、彼と一緒に足を滑らせ、当日、降り積もった新雪に頭から埋没した記憶がある。この時小生は43才、アレハンドロさんは27才であった。次の日、ニジマス養殖場の人がアイヌの伝統衣装を借りてきてくれたの



左から2番目がアレハンドロ・デル・バージェ（1979年2月2日）

で記念撮影をする。

約1ヶ月の研修を終えて、札幌を発つ時、空港行きのバスに乗る前に覚えてばかりのスペイン語で「アスタラビスタ・アミーゴ！」(友よ、また、お会いしましょう！)といて握手して別れた。

この約1年後に開高 健はアルゼンチンを旅し、アレハンドロさんが勤務するネウケン州フニン・デ・ロス・アンデスを訪れている。

「もっと遠く！」「もっと広く！」(朝日新聞社81年刊/文春文庫83年刊)は小説家・開高 健の北米大陸の北端アラスカから南米大陸の南端フェゴ島までの釣紀行である。「週刊朝日」に掲載された同名の連載(80年1月11日～81年4月10日)をまとめたもので、「もっと遠く！」は北米編、「もっと広く！」が南米編である。

48歳の開高 健が日本を出発したのは79年7月20日。フェゴ島に上陸したのが80年3月23日。取材期間は足掛け9ヶ月、正味8ヶ月、約240日にもおよんだ。

次に開高 健の「もっと広く！」に書かれたフニン・デ・ロス・アンデス滞在期間の記録を記す。

この日は川からホテルへもどったあと、体をあためたため乾かし、ふたたび荷造りして釣道具を自動車の屋根に積みこみ、丘をこえ、高原をこえ、山をこえして、道標を頼りにフニン・デ・ロス・アンデスの小さな、小さな町まで長駆する。その町はずれの自然保護局の分所の小屋でアレハンドロ・パージェという好青年に出会う。この青年はブエノス・アイレスの大学を卒業して自然保護官となってこの草深いアンデス大斜面に着任し、鳥獣虫魚の保護の仕事をしている青年科学者なのだが、分所長の娘と仲よくなって結婚し、セニョーラは目下、すでにおおきくふくらんだ臨月近いおなかを抱えて、けだるげに身うごきしている。その父親はガウチョそこのけの猪首で怒り肩のずんぐりした、見るからに精力満々の人物で、初老の年頃と見受けるが、余生はマスと

オンナと酒に捧げるんだと大声でいい放つ。陽性の活力そのもののオヤジであって、のべつチステ(小話)をあの手この手とぶつけてくる。負けじと私も必死になってお脳をしぼり、三日間、朝昼なしにたたかっていたところ、ほぼ互格であった。イノシシにそっくりのこの原野の男に呆気にとられるような肉厚のラテン系美女の娘があり、それがアレハンドロ青年の奥さんなのだが、これがオヤジに似ずたいへん妖艶で奥深いまなざしのセニョーラであった。どうやら魔力を体感しているらしくて、父のイノシシから夫のアレハンドロまでを一瞥一言半句で悠々とコントロールしているらしき気配である。すばやくそれをさどってモリピカ(森啓次郎記者)は色紙でツルなどを折り、うやうやしくさしだして妃殿下のご機嫌をうかがった。妃殿下におかれてはけだるい身こなしのうちにもその妖艶の大きな眼のすみにチラと微笑がうごき、よろしく御喜納あらせられたらしき気配であった。

アレハンドロ青年は日本に来たことがある。マスの孵化事業を参観すべく日本各地を二人の仲間といっしょになって訪ね歩いたのである。そのとき三人は日本的歓待で息もつけないくらい手厚く遇されたらしく、のちに私たちがそのお返しでかれらの厚遇にへどもどしつづグラシアス、グラシアスを連発すると、そのたびに彼らは声をそろえて、ナニこんなモン、日本での歓迎ぶりにくらべればドッてことないスヨ、と恐縮するのであった。どこの何様とわからないのだが、まだ見ぬわが同胞の国際愛にまじめに深甚な感謝をここで述べておきたいと思う。人間、どこで、誰が、いつ、どう、出会うかわからないのだから、やっぱり旅人にはいくら手厚くつくしてもつくしすぎることはありません。アンデスの大斜面をあちらこちらさまよいつつ、よく、そして、つくづく、そう思わせられましたね。彼らがそうやって日本風のゲミュートリヒカイト(親愛)でピンポン玉のようにあちらこちらしているうち、東京滞在の某一夜、モリピカは聞きつけて駆けつけ、われらの大旅行の計画をぶちまけ、いずれ御国へい

ったらよろしくお願ひしますと頭をさげ、彼らは彼らでアルゼンチンのニジマスはこれくらいありますと両手をいっぱいひろげて見せ、そのあとは六本木のディスコで茶ッ茶滅茶苦茶という、おきまり。そんな、仲。

(中略)

この命日酔いの宿酔いのまま翌朝 5 時にアレハンドロ青年の誘われるまま近くの川へ釣りに出かける。ガタガタのシボレーのハーフ・トラックからおりると、にわかにあたり妙な動物小屋のような匂いが甘ったるく漂っている。アレハンドロ青年は、スカンクが一発やったあとなんだと、クスクス笑いながら説明する。それは奇妙に甘ったるく、しつこく、やりきれなくて、どこまでも追いかけてくる悪臭である。しかし、ヤブをこいで川岸にでてみると、淵あり、早瀬あり、トロあり、いことなしの青い水のポイントであった。ここでつれなければこのシーズンにはどこでも釣れませんよと、アレハンドロ青年はいう。しかし、しらじら明けの日光の中で見ると、川岸にはくっきりと草を踏みしだいた足跡がついている。これは犯跡の第一である。よほどの数の釣師が入っている証拠である。それを一瞥したとたんに私は早くも諦めをつける。ルアーをとっかえひっかえしてキラキラ輝く朝陽のなかへ投げるが、やっぱりアタリがまったくない。

(中略)

魚が釣れなくて右の眼がグッタリしているけれどしばらくぶり川の瀬波の音にふれたので左の眼はイキイキしているという妙な状態の私をアレハンドロとイノシシ・オヤジはアサド(焼肉)の会につれていってくれた。これはこのあと何度も味わうことになるが、アルゼンチンの最高のもてなしである。一頭の牛を開いて切りとった肋骨まるごと一枚をカタカナの“キ”の字型の鉄串にぶらさげ、岩塩とコンショウをまぶしただけで、じわじわと炭火で焼く最高のバーベキューである。金色の汗をしたたらしてポツと炎をたてる肋骨からめいめい好きなどを木皿にとって来て食べ、ぶどう酒を飲みつつ、大木の

かげ、日光をさんさんと浴びつつ、チステ(小話)の交換会であり、交歓会である。食肉用羊の生後一ヶ月か二ヶ月ぐらいの丸焼にしてやっぱりキの字型の鉄串で焼くのを“カブリト”と呼ぶが、これは淡白、柔軟、いことなしの逸品であって、ぶどう酒がとめどなく飲める。どちらも塩は食塩ではなくて岩塩でなければならぬ。岩塩は不純物が多いけれど火にあぶられるとはんまり柔らかくて甘くさえあり、とてもいいものである。金色に焼けた、はんまり塩気味の肋骨から肋膜と薄肉を食いとる。モグモグとした快味ったら、ないぜ。野生があるのにあくまでも優しいこの肉。こんな女がいたらどうなるだろうかと、空恐ろしくなってくるぜ。

アレハンドロ青年とその義父のイノシシ・オヤジはウエチュラフケンというヤヤコシイ名前の大きな湖に私たちをつれていってくれ、そこで焼肉の絶妙味で私たちを圧倒してくれたのだが、私は味覚の絶妙と、かつ、メンドー産のぶどう酒に浸されて、牧草地に寝こんでしまった。

(中略)

バリローチェで一匹も釣れず、フニンの川でも一匹も釣れず、ウエチュラフケンの湖でも一匹も釣れなかった。今は二月であるが御当地では真夏のガンガンざかりであって釣にはまったく不向きであると、会う人ごとに教えられ、私も覚悟をきめていたのだが、三連敗はこたえた。いささか焦躁と屈辱の感覚が体内にたちこみはじめ、霧散するばかりの自我をどうとらえていいかわからなくなってくる。いい年をして若いときの熱い惑乱がじわじわと心と体を浸しにかかる。

「南北アメリカ大陸縦断記・南米編 もっと広く!

(下) 開高 健(文芸春秋:1983) 第8章 さらば、草原よ 192-204 頁より (一部省略)」

アレハンドロさんが北海道から帰国した年の5月30日付けの礼状がアルゼンチン国ネウケン州知事から届いていた。それから9年程が経過して、チリ国でJICAのプロジェクトの仕事をしていた長澤有晃

さんがアルゼンチン国ネウケン州に変わられたことを聞いて、何か関係があるのではと思い、9年前に頂いたネウケン州知事の礼状のコピーを同封して手紙を書いた。

まもなく、長澤さんから興奮された以下のようなお便りが届いた。

「同封あったネウケン州知事の貴兄宛礼状、誠に奇しき縁、礼状に示されているアレハンドロはまさしく、現在 私のカウンター・パートであり、私が所属する事務所の所長です。彼は今でも時々、日本へ行った時の思い出話に花を咲かせますが、その記憶力の抜群さは舌を巻く程です。しかし、さすがに人の名前だけは不鮮明で、北海道で誰に逢ったか知りませんが、とにかく皆さんに大変親切にされ、大変な親日家になっています。親日家になるか、ならぬか、ここが日本研修受入れで最も重要なポイントであり、親日家となって帰国すれば、その研修はそ

のことだけで、大成功というものです。

アレハンドロは性格も良く、明るい好人物で、私共（女房にも）には大変親切に、気配り、恐縮してしまう程です。お礼を言う毎に彼は「トндеモナイ、自分が日本で受けた親切から比べると 10 分の 1 もない。もっと何か出来ることがあれば、嬉しいのだが」と言っております。

日本で、何処のどなたか知らぬが、彼に親切にしてくれたお陰で、今 9 年後に私にその恩返しを受けている訳です。心秘かに、日本の彼に親切にしてくれた人に感謝していたところです。その 1 人が我が旧友栗倉兄だったとは、本当に意外であり、世間の狭さを改めて感じます。そして、人との出会いが如何に素晴らしい事であり、大切にすべき事であることも知らされます。

この礼状をアレハンドロに見せたら、彼もオドロキ、それを今まで保管されていた事、ドクトル・ア



ネウケン州中央生態学試験場 (CEAN) 場長 アレハンドロ・デル・バージェ さんと

ワクラが自分の事を憶えていてくれた事、そして私が貴兄の友人であった事 etc の運命の糸の織りなす不思議な縁に感動していました。

貴兄の便りにもあったと通りの陽気な好人物で、毎日楽しく接触しています。勿論、仕事となれば業務上の日・ア相互にゆずれぬ面もありますが、好意が基礎にあるので、特に問題となることはなく、相互に理解と友情をもってやっております。

こちらとしても、魚病部門の協力があり、ひょっとしたら栗倉兄に短期で来てもらう事になるかもしれません。その時は万難を排して来ア下さい。」

以上のようなきっかけで、1990年5~6月にアルゼンチン国ネウケン州に魚病対策の短期専門家として、27日間出かけることになったが、アレハンドロさんとは11年ぶりの再会となり、札幌でお別れする時に、覚えたスペイン語の「アスタラビスタ・アミーゴ！」が実現することになった。

開高 健は「もっと広く！」に、アレハンドロさん

の奥さんを「肉厚のラテン系美女で、妖艶で奥深いまなざしのセニョーラであった」と書いているが、お会いしてみたら、本当に大変な美人であり、開高さんの表現の通りであった(写真参照)。開高 健はこの写真の10年前のアレハンドロさんご夫婦に会っている。

小生は開高 健が訪れてから10年後に訪れたことになるが、アレハンドロ宅の夕食ご招待の写真でアレハンドロさんに抱かれているご長男は開高 健がお会いした時は妊娠中で臨月に近く、生まれる前であったが、10年後には、子供さんも3人になっていた(この時、長澤さん:59才、小生:54才、アレハンドロさん:38才、アレハンドロさんの奥さん:32才)。

開高 健という著名な作家が記録に残してくれ、また、長澤さんから頂いたお便りも残っていたが、開高 健が「もっと広く！」にアレハンドロさんが日本でお世話になったことが書かれていることは、アルゼンチンに行った時に長澤さんからお聞きしたので、帰国後、「もっと遠く！」上、下と「もっと広く！」



アレハンドロ宅での夕食ご招待(左橋:美人の奥さん、左下:同拡大)

左から二人目と四人目は長澤さんご夫妻



フニン・デ・ロス・アンデスを流れるチメウイン川  
(富士山に似た山はランニン山、標高：富士山と全く同じ 3,776m)

上、下 計 4 冊を購入したが、詳しく読んだのは今年の連休がはじめてであった。

開高 健は 1930 年生まれであるから、小生より 5 才年上である。58 才で亡くなっているが、お元気でおられれば、82 才であるから、何かの機会にお話できる機会があったかも知れない。なお、長澤有晃さんは、開高さんより 1 才年下であった。

長澤さんはお便りに書いているが、「人との出会いが如何に素晴らしい事であり、大切にすべき事であることも知らされます」、また、開高さんは「人間、どこで、誰が、いつ、どう、出会うかわからないのだから、やっぱり旅人にはいくら手厚くつくしてもつくしすぎることはありません」と書いているが、全く同感である。

アレハンドロさん達が 33 年前に来日した時、週間朝日の「南北両アメリカ大陸縦断記」の計画は既に決められていたようで、「もっと広く！」を読むと北海道にやってきた時、東京で滞在中に森啓次郎記者と交歓している。すなわち、南米編ではアルゼンチ

ンではネウケン州のフニン・デ・ロス・アンデスを訪れることは出発前から決められていたようである。

アレハンドロさん達は、日本を訪れた時、北海道以外に長野県、岐阜県なども訪れているので、他の県でも大変お世話になったものと思うが、フニン・デ・ロス・アンデスまで行って、「アスタラビスタ・アミーゴ！」を実現できたのは、多分、小生だけだったのではと思っている。小生の後、同じ職場の何人かの若い人達が専門家として CEAN に派遣されている。

「もっと広く！」を読むと、22 年前に訪れたフニン・デ・ロス・アンデスが懐かしく思い出される。

小生が「アスタラビスタ・アミーゴ！」を実現できたのは、やはり長澤有晃さんのお陰である。

残念ながら、長澤さんの奥さんは 4 年前の 10 月、長澤さんは昨年 6 月に他界された。

ご冥福をお祈りする。

(2012 年 5 月 28 日)

・追記：チリに在住されている故長澤有晃さんのご子息、長澤信晃さんにアレハンドロさんのメール・アドレスが分からないかどうかとメールを書いたら調べてくれて、アレハンドロさんのメール・アドレスが分かった。早速、近況伺いのメールを書いたら次のようなメールが来た（2012年6月2日、6日）。

親愛な栗倉さん

メールを頂き、大変嬉しく思いました。あなたには良い思い出と感謝の気持ちがございます。私は何時も貴方が我々の仕事を助けてくれたこと、特にあなたの親切と善意を思い出しております。

1979年2月1日の上川町での私の誕生日を記憶していますか？私は大変良い記憶として残っており、本当に沢山飲みました。

約5年前から私は、もう CEAN の場長ではありません。

私は今、60才であり、今年、あと何か月かで退職

する予定です（ネウケン州では60才が定年退職年齢です）。なお、退職後は民間の顧問として働く予定です。

長澤さんが亡くなったことは大変悲しいことです。友人が亡くなることを受け入れることは大変困難です。

私は昨年のクリスマスに写した家族の写真を送ります。私の長男（31才）はブエノス・アイレス市に娘（29才）と次男（25才）はラプラタ市に住んでいます。妻（54才）は既に退職しており、我々はフィン・デ・ロス・アンデスの昔の家で大変幸せに暮らしています。

あなたと連絡できたことは大変嬉しい。私はパタゴニアから固い抱擁とともにご挨拶を送ります。

お元気で

アレハンドロ・デル・バージェ



アレハンドロさんが送ってくれた写真（2011年のクリスマス）

左からご長男（31才）、ご次男（25才）、アレハンドロさん（60才）、奥様（54才）およびご息女（29才）

(最初のメールの一部が理解できなかったので、再度メールを書いたが、その2通のメールを纏めたものである。2通目のメールにはご自宅の写真が添付されていた)

33年前に3名で北海道にやってきた時は、アルゼンチンから見れば、地球の裏側のアジアの小さな国の一番北の上川町で、我々と一緒に27才の誕生日を迎えたことが、印象に残っていたようで、アレハンドロさんが開高 健や長澤有晃さんに語った日本の印象の大きな部分を占めていたようである。なお、このときは日本に約3ヶ月間滞在しているが、東京に何日か滞在した後、北海道が最初の研修場所であった。

小生にも上川町でのことが、強い印象として残っていたが、誕生日のことは、アレハンドロさんのメールを読むまで忘れていた。上川町漁協の連中もアレハンドロさんが誕生日であったことで、良くしてくれたの

ではないかと思う。

アレハンドロさんは60才になり、ネウケン州の定年退職の年齢になったようである。

開高 健が32年前のアレハンドロさんの奥様(当時:22才)を「肉厚のラテン系美女で、妖艶で奥深いまなざしのセニョーラであった」と書いており、小生がお会いできた22年前にも32才になっておられたが、その面影があり、近づき難いところがあったように記憶している。今回送っていただいた写真を拝見すると、3人の子供さんたちも25~31才に成長され、親しみのもてそうな54才になっておられた。アレハンドロさんは退職後、民間の顧問として働かれる予定のようだが、これからのご夫婦の幸せな余生を願っている。

(2012年6月24日)

(元北海道立水産孵化場長:あわくらてるひこ)